

「俳句の小径」の五十崎古郷、そして水原秋桜子 ～波郷の師～

校長 玉井 啓二

本校の正門のすぐ西側に位置する「俳句の小径」には、垣生に縁のある村上霽月や石田波郷をはじめ、松山が輩出した有名な俳人の代表的な俳句を記した句碑が設置されています。7月17日号では、この「俳句の小径」の全体像を紹介しました。それらの中に、五十崎古郷の次の俳句があります。

げんげ田や花咲く前の深みどり 五十崎古郷

五十崎古郷は、1896年（明治29年）、伊予郡余土村（現、松山市余戸中）に生まれました。昭和3年頃から水原秋桜子に師事し、本格的に句作に専念します。本校の卒業生である石田波郷は、この五十崎古郷に師事していました。「波郷」の号も古郷がつけたものです。波郷は古郷の下で句作に励んでいましたが、波郷の才能を認めた古郷は、昭和7年に東京の秋桜子の元へ波郷を送り出しています。秋桜子が主宰する「馬酔木（あしび）」の編集に携わるようになった波郷は、やがて全国的に活躍して昭和を代表する俳人になりますが、そのきっかけは古郷との出会いにあったのです。

この俳句にある「げんげ」は、れんげ草のことで、春の季語です。今ではあまり見られなくなりましたが、以前は田植えの前になると、一面「げんげ」が咲いていました。「げんげ」のかわいらしいピンク色の花が咲く風景はとても美しいのですが、花が咲く前の、まるで緑の絨毯を敷いたような深緑も大変美しいものです。私たちは、ややもすると花の美しさだけに目が奪われがちですが、この俳句には、花の美しさとは異なる深緑に美しさを感じる古郷の感性の素晴らしさが表れていると思います。さらには、「私たちが気付かないところにも価値が潜んでいる。そのような価値を感じ取る感性を磨きなさい。」という教訓を私たちに与えているように思います。

ちなみに、古郷と波郷が師事した秋桜子の句碑が、県内に唯一、松山市出合の出合橋北側にあります。この句碑には、次の俳句が記されています。

おうち せきり 古郷波郷の 邑かすむ 水原秋桜子

水原秋桜子は、学生時代、高浜虚子の文学に刺激を受け、研鑽を重ねて、虚子が主宰する「ホトトギス」の課題句の選者となります。しかし、「主観写生」を提唱して「客観写生」の虚子と対立し、昭和6年に「ホトトギス」を離脱しました。この時に、古郷も波郷も、秋桜子が主宰する「馬酔木」に移っています。

この俳句は、昭和27年5月に秋桜子が松山を訪れた際、松山城に上り、そこから門弟である古郷と波郷の生まれ育った当時の余土村や垣生村を展望して詠まれたものです。この俳句の中の「樗（おうち）」とはセンダン科の落葉高木で、梅檀（せんだん）とも呼ばれています。6月頃に薄紫色の花が群れて咲き、万葉の時代から歌によく詠まれています。

私は、週末になるとウォーキングで松山城に上るようにしています。本校に赴任してからは、この秋桜子の俳句を思い起こし、「秋桜子も古郷や波郷の地元での活躍の様子に思いを馳せ、頼もしく思いながら、ここから景色を見ていたのだろうか。」と想像しつつ、松山城から垣生地区を見ることが楽しみのなっています。そして、「このように豊かな時間を過ごすことができるのも、本校に赴任できたおかげだな。」と感謝をしています。

【参考】俳句の聖地「愛媛・松山」へ吟行をいざなうサイト | 五・七・五のこころ旅 吟行ナビえひめ

四国・愛媛 俳句の里 松山

